

内部マネジメントの3パターン（2）

—伝統型マネジメントとその活用法—

カリスマ型マネジメントの崩壊

前回、このコーナーで述べたカリスマ型マネジメントは、前近代的な内部マネジメントの在り方でした。ウェーバーによると、カリスマが亡くなった後、組織は残りの2つの類型のいずれかの内部マネジメントの在り方に移行することになります。今回はそのうちの1つである「伝統型マネジメント」について見てみることにしましょう。

伝統型マネジメントとは

「伝統型マネジメント」とは、読んで字のごとく「伝統」にのっとり種々のマネジメントを行うことです。「伝統」という表現がわかりにくければ、「慣習」や「習わし」と読み替えても差し支えありません。

要するに、これまでの組織で慣行的に行われてきた通例のやり方に基づいて組織のマネジメントを行うのが伝統型マネジメントです。

伝統型マネジメントの特徴

この伝統型マネジメントは、“偉い人”の個人的資質に基づいて全ての管理が行われるカリスマ型マネジメントに比べると属人性は低く、その意味では近代的な内部マネジメントの在り方とっていいでしょう。

但し問題は、「これまでずっとそのように行われてきたから」というただそれだけの理由に基づいて、何らそれ以外には考えたり分析したりすることないままに、物事の進め方が正当化されることです。

例えば、組織でプロジェクトを進める際に、とりあえず前例踏襲をして対応しておこうと考え、安易に前回と同じやり方で対応しようとする場合がよくあります。こうした対応の仕方が伝統型マネジメントの典型例です。

伝統型マネジメントにもメリットがある

こうして、前例踏襲というネガティブな印象を抱きがちで、積極的な文脈で語られることの少ない伝統型マネジメントですが、実はメリットもあります。そして、この伝統型マネジメントのメリットを知っておくことが、皆さんが効率的に物事を進めていくうえでのヒントを得ることにつながります。

わたし自身も、実は日頃「伝統型マネジメント」を随所に使いながら日々の物事を処理していつています。真剣によく考えたうえでこなしていけないといけないような事案、例えば研究論文を書くときや学生の指導などの場においては、決してこの伝統型マネジメン

トは利用しません。むしろ五感を十全に働かせつつ、1つ1つ時間をかけて真剣に進めていくようにしています。

「どうでもいいこと」への対応

しかし、皆さんの組織でもそうでしょうが、どうでもいいような事柄（しかし、やらな
いといけない事柄）については、わたし自身は、できるだけ素早く効率的に、最小限のエ
ネルギーで済ませられるように、この伝統型マネジメントを活用するように心がけていま
す。つまり、「こういうケースでは、以前はどのように対応していたか」を探し、殆ど考え
ることなくそのやり方に従って、物事を前へ進めていくようにしています。

この場合、エネルギーは殆ど使いませんから疲れることもありません。そして、とりあ
えずは物事を前へ進めていくことができます。いわば省エネ運行ができるのです。

識別できる能力

ここで重要なポイントは、自分に降りかかってくる仕事や作業のうち、どれはきっちり
エネルギーを最大限投入してコミットするか、そしてどれは適当に済ませばよいかを、き
っちり識別できる能力を身につけることかも知れません。後者の「適当に済ませばよい」（適
当でも許容される）事項に対しては、思い切って伝統型マネジメントを適用してやればい
いのです。

以前、当コーナーで「戦略的発想」の基礎は事項を列挙してその優先順位を付けること
にあると説明しましたが、自分の為すべきことを列挙し、優先度の低い事項には伝統型マ
ネジメントで対応するようにしてみると、仕事が一気に効率的にはかどるよう革新できる
かも知れません。

次回は、伝統型マネジメントよりもさらに効率的なマネジメント手法について説明しま
す。

株式会社インソース <http://www.insource.co.jp/>

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-19-1 神田橋パークビル 5階

TEL : 03-5259-0070 FAX : 03-5259-0075